芥川龍之介の「馬の脚」における帝国日本の表象

――その寓意・諷刺をめぐって――

孔　月

はじめに

「馬の脚」は、芥川が一九二五年（大正十四年）雑誌『新潮』の一月一日、二月一日の両号にわたってそれぞれ「馬の脚」「続馬の脚」という題で発表したものである。[1] また、芥川が大正十年（一九二一年）三月に大阪毎日新聞社の海外視察員として中国に旅行した四年後に発表された作品でもある。「馬の脚」は第一革命（辛亥革命）後の中国北京を舞台としながらも、主な登場人物は日本人である。その意味では、芥川作品に多い中国物とはいえず、むしろ日本帝国の大陸進出に一定の距離を置いた諷刺的作品として、芥川の政治的姿勢を問題とするうえで、欠かせない作品と捉えるべきである。それが本稿の考察の理由となる。

「馬の脚」は次のようにまとめられる。主人公は、忍野半三郎という「北京の三菱」に勤めるごく平凡な人間である。彼は妻と平穏な生活を送っていたが、ある日仕事場で頓死してしまう。「同仁病院」の院長山井博士は忍野の死因を脳溢血と診断した。しかし、忍野本人の臨死体験によると、死者を振り分けるあの世で、彼の死が美華禁酒会長ヘンリイ・バレットとの人違いであったことが判明する。忍野は元の世界に送り返されることになるが、復活して現実に戻ってみると、不幸にも両脚が腐っていた。そこで支那人が彼に死んだばかりの馬の脚を無理矢理に取り付けることになる。こうしてひとまず治癒した忍野だが、脚の秘密を世間や妻に知られることを恐れて苦悩する。やがて、馬の脚は馬としての本能を現わし、忍野の意志にそむいて、勝手に動き出そうとする。折から蒙古からの黄塵の吹きすさぶ三月のある日、彼は何

かに追われるように躍り出し、ついに黄塵の中へ走り去って行方不明になる。半年後、忍野は妻のとどまる家の玄関先に現れるが、脚の秘密に気付いた妻常子の「名状のできぬ嫌悪」を察知し、ふたたびどこかへと去っていく。

このような奇妙なストーリーをもつ「馬の脚」は、単行本には収録されず、また芥川自身の言及もほとんど見当たらないためか、先行研究は非常に少ない。しかし少ないながらも、たとえば吉田精一は「ゴオゴリ『鼻』からヒントを得た」[2]と指摘し、また、中村真一郎は「カフカ張りの作品」[3]、つまり非現実的な変身譚であると述べている。さらに、森英一は「芥川における『狂気』の問題を考察する際、一瞥すべき作品」[4]と言及している。このような言及以外にも、近年の先行研究についていえば、まず一つには典拠研究が認められる。この作品はいかにも中国取材の小説らしく奇妙な筋立をもつためか、同じ傾向をもつ中国説話の転生譚とのかかわりを探究した論考がいくつか見られる。ただし、吉田精一による指摘以来、その出典についてはいまだに未決定の段階にある。もう一つには、作品の諷刺的要素に重点を置いて考察する方向が認められる。すなわちその諷刺には国家主義や家族主義、また当時の文壇で流行る告白小説などへの芥川の批判精神があるとされ、さらにそこにおいて芥川の幻想文学をとらえようとする視点も見られる。あるいは、芥川自身の狂気の問題と関連づけようとする指摘も見られる。

先行研究による以上の作品論はそれぞれに示唆に富み、特に「馬の脚」における諷刺的要素の分析は十分説得力をもっていると評価できる。しかし、この諷刺性をどのような政治的・文化的なコンテキストと結びつけるかという点で、本稿はこれまでの研究の指摘を尊重するとしても、それ以外にも諷刺の対象があったと考える。つまり、従来の視座とは違った見地から「馬の脚」の諷刺性を捉える必要があるのである。こうした見地から、日本帝国主義による満蒙政策に対する芥川の批判的姿勢が、きわめて寓話性豊かなかたちで展開されていることが明らかにされるだろう。先行論文には共通して欠けている視座がある。それは、作品中に見られる〈馬の脚〉を取り付けるという設定と、当時の日中外交において政治的に重要な位置を占めていた北京を設定したこととの関連がもたらす政治的意味に関して触れられていないという点である。

本稿は、従来の諷刺分析の研究を踏まえながら、これまで見過されてきたテキストと時代の政治的背景の関係に着目する。そして、その関係をテキスト中のさまざまな表象を解読することで明らかにし、そこから新たな作品論を立ち上げていくことにする。

一、表象その（1）―北京の三菱・本願寺布教師、そして〈馬の脚〉

前述したように、「馬の脚」は、辛亥革命後を背景とした、中国と日本の外交史にとって微妙な時期に当たる作品である。そこでまず、革命前後の中国がどのような情景を呈していたのかを、このテキストの解釈に必要な限りで見ておかなければならない。

二十世紀初頭の中国清朝政権は、欧米列強による分割によって激しく動揺していた時期であった。当時富国強兵の近代国家をめざしていた日本も、清朝政権の動揺を見すかすようにして帝国主義諸列強とならんで大陸へ進出してきた。やがて日清戦争によって清朝政権の弱体が暴露されると、中国分割が帝国主義列強の間で大きく進展していく。その利権争いにかかわる重大事件として三国干渉、義和団事件、さらに日露戦争がある。とりわけ、日本の大陸進出は日露戦争における勝利によってさらに進み、一九〇六年前後、日本の国策の焦点は官民挙げて中国大陸に向けられていく。「北京の三菱」はそのような時期に北京に進出したものだった。その背景には日露戦争終結を解決するポーツマス条約によって、日本が南満州における鉄道経営権を掌握し、満州政策が日本の国策の基本としてはっきりうち出されたことが挙げられる。

この頃、日本からは多くの大陸浪人、特に玄洋社・黒竜会などの秘密結社が渡り、その動きが活発化したが、彼らの多様な活動においては、清朝政府からの満州の独立、満州における経済権益の日本領有を満州の内部から画策することが重要な任務となっていた。やがて一九一一年（明治四十四年）中国では辛亥革命が起こり、清朝が倒れ、翌一九一二年に中華民国が成立した。

このような概観から「馬の脚」の背景として留意すべきものが浮かび上がる。それは大陸浪人が辛亥革命に参加したことであろう。そこで彼らは、日本政府の擁護する清朝に資金、武器を提供することによって、満州や蒙古での利権を獲得しようと画策していた。この秘密工作こそがいわゆる満蒙独立運動であり、政治体制の動揺期に三回にわたって実行された。このように、辛亥革命前後の中国は、新しい政権が誕生したとはいえ、その変革が軍閥間の権力闘争にとどまっていたために、軍閥を背後から操る欧米列強および日本の帝国主義に立ち向かうことができなかった。要するに、中国大陸全体は依然欧米列強と日本の利権奪取の危機にさらされていたのである。

「馬の脚」には、芥川が一九二一年に中国大陸視察した経験が生かされているだけでなく、彼の中国へのまなざしは、それよりもほぼ一〇年前に始まった辛亥革命の政治過程と帝国主義列強の進出・侵略の関係に向けられていたと考えられる。このことは、このテキストのストーリー、そしてまたテキスト中のさまざまな表象から見てとれる。本稿はその意味で「馬の脚」が日本の大陸進出時期を背景にしていることに注目する。テキストの内容は確かに寓話風に展開されていくが、そこには「東単牌楼の社」「隆福寺の古本屋」「徳勝門外の馬市」「正陽門」などといった当時実在していた（あるいは今日も実在し続けている）場所とともに、帝国日本の大陸進出の尖兵となった「三菱」などの総合商社や、「順天時報」「同仁病院」などといったメディアあるいは医療機関が実名をもって登場している。

このことが何を意味しているのか。本稿はそれらの実名の表象が総合的にこの小説の意図を示していると考える。とはいえ、こうした実名の表象から分析を始める前に、これまでの中国激動の歴史的背景を踏まえる必要があろう。

そこでまず、「馬の脚」が北京を舞台に設定していることを先行研究がどのように捉えているかの紹介から入ることにしよう。単援朝氏によれば、「舞台の設定に旅行の経験が生かされていることは明らか」であるが、「「お伽噺」の世界をあくまで現実として描く作者の姿勢を示している[5]」とみなしている。これに対して、秦剛氏は「「馬の脚」では散りばめた町の地名を除いて、その北京体験が生かされたとは思われず、描かれたのは基本的にやはり日本人社会で、所詮北京という設定はあくまでも一つの記号としてしか機能していない。《異常な事件》の都合のよい舞台である中国、荒誕な出来事が起こる架空の都市北京」と述べており、「日本近代文学が歪んだ、幻の中国像を作り上げた長い歴史のわずかな一端がここに見られる[6]」と指摘している。両氏はいずれもこのテキストを寓話ととらえることでは共通しており、そこに作家芥川の当時の問題意識を読みとろうとしているのだが、その解釈の方向性は「お伽噺」とか「架空の都市北京」という認識からもうかがえるように、テキストの舞台となる北京はあくまでも作品設定の場にすぎず、テキストの主題とはあまり関連を持たないものとして扱われている。

しかし、テキストの歴史的背景や、テキストに布置されている「順天時報」「同仁病院」などかつて実在した表象と都市北京とを考え合わせてみると、作品空間としての「北京」という都市表象は、単に「異常な事件」の起こる「架空の都市」としてというよりも、むしろ日本帝国主義の浸透する北京の危機的様相が集約された作品空間として見なければならないのではないだろうか。そこにおいてこそ「見たことのない事務室」や冥界の裁判官のごとき二人の「支那人」、さら

には半三郎の頓死と復活といった奇妙な構成が生きてくるのである。すなわち本稿は、こうした構成が北京を舞台にした日本帝国主義による植民地政策の寓意として解釈することができる視点をとるのである。

以上のような本稿の解釈を例証するためには、作品に散在しているさまざまな表象を整理する必要がある。まず主人公忍野半三郎が勤めている「北京の三菱」から見てみる。「北京の三菱」は、当時北京東単牌楼大街路西に位置した「三菱公司」[7]を指すが、明治四二年十月三菱合資会社によって北京に設立された出張所である。やがて大正七年創設の三菱商事株式会社へ移管の上、同九年支店と改めた。その業務内容は支那海軍の兵器引受、鉱山の調査、棉花の改良等といった各種事業であった[8]。三菱は「一九一〇年代から一九二〇年にかけて、他の日本最大の独占体（住友、安田、三井）と同様に、コンツェルンとして最終的に構築」され、「当初から国家の著しい支援によって発展した」[9]海外進出の尖兵商社として、政府と緊密な共生関係を築いた。三菱を含む日本の独占資本は資本蓄積の過程で、大きく国家の政策とかかわる国家的側面をもっていたといえよう。「国家の著しい支援によって発展した」ということは、当時の日本帝国主義の政策に深く組み込まれることであって、国家はこのような日本型コンツェルンを中国に進出させることによって、経済的支配を強めていったことがわかる。

以上のような三菱の歴史資料に従えば、「馬の脚」の主人公忍野半三郎は日本帝国主義の中国進出政策を具体的に実現することを企業活動とする日系商社の進出とともに、北京に赴任する人物、すなわち北京駐在の三菱社員として設定される。しかも彼の会社勤めが同時に日本帝国主義の政策につらなっていくことを、以上の三菱の歴史から容易に推測できよう。ただこのテキストの当初にあっては、彼の設定はきわめて現実的であって、恐らく個人（忍野半三郎）と日系商社（三菱）の関係がそのまま日本帝国主義の大陸政策へと結びついていくとはとても考えることはできない。

したがって結論を先取りすることになるのだが、このテキストがあくまでも冒頭部のリアリズムにとどまろうとすれば、テキストの意図する主題―個人の誠実な行動が個人の意識を超えて実は国家の植民地政策へとつらなっていくという不条理性を直接的に表すことはできない。また主人公にとっても自己の意識を越えて自己の存在自体が国家の政策に組み込まれているといった大きな意味をもつていることなど予想すらできなかろう。しかしこのテキストの意図はまさにそこにあった。

芥川はこのテキストの意図する主題を十分に認識していたといっていいと思われる。それは奇妙な幻想

性を帯びた寓話という方法をとることであった。以下では、そこに込められた意図と寓話の関係性の一端を探ることにしよう。

忍野は「人間違い」により、「見たことのない事務室」、このテキストの比喩でいえば、冥界に入り、冥界の裁判官らしき二人の「支那人」が彼に〈馬の脚〉をつけ、人間界に復活させる。

彼はえたいの知れない幻の中を彷徨した後やつと正気を恢復した時には××胡同の社宅に据ゑた寝棺の中に横たはつてゐた。のみならず丁度寝棺の前には若い本願寺派の布教師が一人、引導か何かを渡してゐた。（二四七頁）

ここで「本願寺派の布教師」が、死者を浄土へ導くことを意味する「引導」を渡す僧徒として登場していることに注目したい。それは二つの意味においてである。すなわち、一つは「本願寺派」が日本帝国の大陸進出に「布教」という役割を担って深く協力したという史実であり、もう一つは死と復活の場面に込められた寓意である。まず前者から見ていくと、一九二一年に書かれた丸山昏迷の『北京』[10]によれば、本願寺派は一九〇五年五月に北京に本願寺派出張所を設立した。「本願寺派」といえば、正しくは浄土真宗本願寺派であるが、京都の西本願寺を本山とする浄土真宗十派の一つである。日清戦争後は朝鮮、台湾を端緒にアジア地域へ進出して布教活動を広め、大陸浪人の教化のほか従軍僧として戦地へ赴くなど、活動は活発化した。アジアの各都市に次々と別院・説経所を設立し、海外に向けて布教して以来、皇民化政策の遂行や植民地および占領地域での現地支配層とのパイプ役・宣撫工作などでは、多大の貢献をなしたとされている。[11]「本願寺派」の教義は皇民化政策と一体化されて布教された。このような「本願寺派」の布教は、日本植民地政策に呼応するという政治的目的に向けられた宗教活動であったことがうかがえる。

「本願寺派の布教師」が帯びていた政治的役割が以上のように捉えられるとすれば、後者の寓意に込められた意味を次のように解釈することが可能となろう。つまり、忍野の復活がなぜ「本願寺派の布教師」が「引導を渡す」場面に連結していたのかということである。忍野は死の淵からこの世に復活するが、その際に本願寺の布教師に往生への引導を渡されている。しかし奇跡的に復活し、彼の脚には〈馬の脚〉が取り付けられることになった。とすれば、彼の復活は、元の商社員忍野としての復活ではなく、〈馬の脚〉をもった忍野としての新たな復活ということになろう。このような構成は日

本文学の伝統に認められる死と復活のモチーフであり、「本願寺派の布教師」の引導渡しも、それと結びつくのであって、往生のためではなくこのような新たな復活と意味的関連をもつと解釈できる。では復活した半三郎は「引導を渡」されて、いかなる人間に生まれ変わったのかをみよう。

まず芥川がキリスト教に親しんでいるところから、キリスト教的な意味での「復活」と日本の文学伝統における蘇生の差異を明らかにして、この小説での復活が後者に属することを確認しておこう。死と復活というモチーフは、文学の伝統からすると、神話・説話・昔話の領域で知られているモチーフである。ただ民話学者中村禎里[12]によれば、その復活で知られていることは、西欧では一度死んで生き返るというのが「復活」とされるのだが、日本の場合、死ぬことに輪廻思想が結びついて魂と肉体の分離が信じられているために、一度死んだあとは別の肉体をもって生き返るのが「復活」によく見られるパターンであるとされる。こうして〈馬の脚〉をもった忍野の「復活」は、決して元の忍野としての復活ではなかったことがわかろう。

それに、以上提供した資料から本願寺の布教が政治的には国家主義的なイデオロギーを帯びていることと知ることができた。とすれば、忍野半三郎は北京に進出した三菱系の商社員であることによって国家的色彩を帯びた日本帝国主義を無意識的にしろ担う人物として「復活」したという解釈が可能となる。そのことは、たとえ主人公の忍野にとって無意識ではあっても、時代の大きな趨勢が彼の認識を超えて彼をそのような立場に立たせてしまっているのである。時代、国家、個人の関係をめぐる不条理がここに込められている。

読書家である芥川の教養範囲から推定できることは、彼が日本の説話に人が死を経て復活する場合は必ず新しい人物として再生するという前掲した知識をもっていたはずである。「北京の三菱」の商社員に「本願寺派の布教師」が「引導を渡す」という死と復活の設定には、芥川が日本古典の説話から汲み取った死と再生のモチーフをこのテキストに生かそうとする彼の創作方法を垣間見ることができよう。そこには自然主義の限界を越えようとする彼の意欲があった。このような趣向を施したのは、テキストの後半に施されるテキストの寓意の伏線となるものだが、これについては後に論じることにする。

二、表象その（2）——同仁病院・順天時報

「馬の脚」のテキストでは、忍野にまつわる表象以外にも「同仁病院」院長の山井と「順天時報」の主筆牟多口という人物にも日本帝国主義的表象がまとわりついている。この節ではそれらについて言及してみよう。

二人の登場は、忍野の死と復活の場面設定にからんでいる。両者は終始同じ見地から忍野の復活、そしてそれに続く失踪を「発狂」と解釈し、そのうえで懸命に世論を形成しようとする存在として設定されている。また「同仁病院」も「順天時報」も、前述した「三菱」や「本願寺派」のように、当時北京に実在した日系の病院であり、新聞であった。

では、このような設定はどんな意味をもっているのだろうか。ここでも、前節と同じような方法で、「同仁病院」という施設と「順天時報」という新聞が設立された歴史を探っていきたい。まず、医療施設の一つとして北京に建てられた「同仁病院」から見てみよう。「同仁病院」は北京における日本人経営の病院であり、同仁会の事業に属する日華同仁医院が創設母体となっており、また、北京の東単牌楼三條胡同にあった日支親善を主張する財団法人同仁会が経営する機関でもあった。やがて同仁会は、満州における医院の経営権を南満州鉄道株式会社（以下満鉄）に移譲し、満鉄が医院設立を計画するようになった[13]。満鉄は、一九〇六年十一月に創立され、「陽に鉄道経営の仮面を装い、陰に百般の施設を実行[14]」した満州における日本最大の半官半民国策会社である。創設の当初から近衛文麿をブレーンとして多くの知識人、学者、専門分野の研究者、官僚、経済人、政治家、ジャーナリスト等が集結し、「「満鉄」という戦前最大の国策会社の一大調査機関[15]」を形成したのである。同仁病院は満鉄の経営下にあった以上、日本帝国主義の大陸進出の政策に協力する窓口ともなっていたといえる。

それでは、こういった同仁病院の歴史的背景は、テキストの中で描かれる「同仁病院」とどのようなつながりをもっているのだろうか。「同仁病院」院長として設定されている山井博士の造型は、次の一節からはっきりとうかがい知ることができる。

> 半三郎の復活の評判になつたのは勿論である。「順天時報」はその為に大きい彼の写真を出したり、三段抜きの記事を掲げたりした。（中略）尤も山井博士の信用だけは危険に瀕したのに違ひない。が、博士は悠然と葉巻の煙を輪

に吹きながら、巧みに信用を恢復した。それは医学を超越する自然の神秘を力説したのである。つまり博士自身の信用の代わりに医学の信用を抛棄したのである。（二四七頁）

山井博士は半三郎の死を脳溢血と診断したが、半三郎は復活する。本来、山井博士は医学知識を駆使して、大陸に進出してきた日本人の医療を支えることが使命の一つだったろう。しかし半三郎の病気を誤診したことが明らかになったとき、「医学」を担うべき博士の「信用」は危機に瀕する。そこで博士は、医学者にはあるまじき「自然の神秘」を持ち出し、半三郎の死からの生還と結びつける巧智をふるった。

博士をこのような行動に走らせたのは、博士自身の「信用」の失墜が日本という国家の権威の失墜につながると信じられたからであろう。このことは前述したような同仁病院の歴史的背景と重ね合わせてみることによっていっそう明白なものとなる。博士は科学の価値よりも国家の価値を選んだのである。医師であること以上に国家主義者であることが優先されていると換言することもできよう。したがってまた、命名の暗喩として山井の〈病〉とは、この院長が患者の病気を治すのではなく、かえって自身が病気になっている者という皮肉な諷刺も込められている。

その後、復活した忍野が自分の脚に接続された〈馬の脚〉を妻の常子の眼から隠すために長靴と格闘している場面が続く。

常子はやむを得ず荷造りに使ふ細引を一束夫へ渡した。すると彼はその細引に長靴の両脚を縛りはじめた。彼女の心に発狂と言ふ恐怖のきざしたのはこの時である。常子は夫を見つめたまま、震へる声に山井博士の来診を請ふことを勧め出した。しかし彼は熱心に細引を脚へからげながら、どうしてもその勧めに従はない。（改行）「あんな藪医者に何がわかる？あいつは泥棒だ！大詐欺師だ！それよりもお前、此処へ来て俺の体を抑へてゐてくれ。」（二五〇頁）

とすれば、〈馬の脚〉を取り付けられた忍野が山井院長を「藪医者」「泥棒」「大詐欺師」と呼ぶのは前述の文脈と同じ流れで理解すべきである。つまりそこには、彼が院長となっている「同仁病院」という機関の性格もまた暗示されているのであり、医療機関が日本帝国主義による大陸進出の狂気の尖兵となっていることが見てとれるのである。

次に「順天時報」について見てみたい。「順天時報」が「同仁病院」とともに半三郎の死と復活の設定にからんでいることはすでに触れた。その主筆牟多口は半三郎が失踪した翌日、「その椽大の筆を揮つて」「失踪を発狂の為と解釈」し、その責任まで追求する。その内容は次のようである。

夫れわが金甌無欠の国体は家族主義の上に立つものなり。家族主義の上に立つものとせば、一家の主人たる責任の如何に重大なるかは問ふを待たず。この一家の主人にして妄に発狂する権利ありや否や？（中略）然れども世界に誇るべき二千年来の家族主義は土崩瓦解するを免れざるなり。（中略）軽忽に発狂したる罪は鼓を鳴らして責めざるべからず。否、忍野氏の罪のみならんや。発狂禁止令を等閑に附せる歴代政府の失政をも天に替つて責めざるべからず。

（二五一頁）

牟多口の筆になる社説に従えば、〈馬の脚〉を取り付けられた半三郎が自己の意思にかかわりなく、〈馬の脚〉（の意志）によってどこかへ消え去ったことを「発狂」としている。そのうえで「順天時報」の社説は、彼の失踪が「家族主義」を「土崩瓦解」させ、そのまま「金甌無欠」の「国体」を危うくするほどの大きな「罪」だと指弾することになる。個人の「発狂」を家族から天皇制国家の運命に関わる「罪」と拡張して解釈し、論旨を「発狂禁止令」までもっていくところなどはあまりにも大げさである。この論旨で注意すべきなのは、この社説が北京に駐在する日本人（あるいは中国知識人）を主な購読者としていることである。このことを踏まえると、この論旨が個人―家族―国体を相即的に結びつけようとしていることに注意すべきであろう。つまり、たとえ狂気といった個人の問題であろうとも、そのことは中国に進出した帝国日本の〈正義〉を傷つけることになるという主張に結びつくのである。この論旨こそ、テキストに後述されているように、当時の周作人が「順天時報」のことを「日本の事といえば宣伝、弁解に努める」[16]と皮肉っていることと照応するものだろう。それは明らかに作家芥川の戯画的手法であり、そこに作家の諷刺が秘められていると考えられるわけである。

ただ「尤も発狂の為と解釈するのは馬の脚の為と解釈するのよりも容易だつたのに違ひない」、「難を去つて易に就くのは常に天下の公道である」という語り手の解説は、実は芥川の当時の日本国家政策への反発は直線的に言説化されることはなく、日常の嘲笑と皮肉にあふれたウィットに韜晦させようとしていることがうかがわれる。

『順天時報』は一九〇一年十二月に中島真雄[17]によって創刊され、当時北京で出されていた新聞のうち、発行部数が最も多い日本人経営の漢字（中国語）新聞である。それまで清国政府は外国人が北京で新聞・雑誌を刊行することを禁じていたが、義和団事件を機に政府の禁止は無視され刊行が強行された。日露戦争開戦時に『順天時報』は「主戦論」を展開したが、それが日本の外務省及び軍部に買[18]わされ、外務省が直接経営する新聞となった。こうして外務省の管理下に置かれた同紙は、日本の国策遂行のための協力言論機関に転じ、中国知識人の厳しい批判を受けるようになった。その代表的な人物として、前掲した周作人を挙げることができる。周作人（魯迅の弟）は中国の作家、日本文学研究者として知られているが、彼は当時の中国における『順天時報』を「人を損じてみずからも利せざることは、日本が支那の各所において漢字新聞を設立して、妖言、衆を惑わすことである。北京の『順天時報』のごとき、日本の事といえば宣伝、弁解に努める[19]」と批判するとともに、「『順天時報』のたぐいはすべてこれ日本軍閥政府の機関である[20]」と断ずるように、厳しい批判の目で見ていた。

このように『順天時報』は、日本帝国主義の出先機関として宣伝メディアの役割を果たし、大陸における日本の権益を擁護する論調を展開し、中国人の世論をも操作しようとする役割を担ったのである。しかし、これは中国人にとっては大きな迷惑であったことは間違いない。芥川自身も「侏儒の言葉」で「輿論は常に私刑であり、私刑はまた常に娯楽である。たとひピストルを用ふる代りに新聞の記事を用ひたとしても[21]」と述べているように、新聞メディアの世論操縦の威力を承知していた。「馬の脚」には、後述するように、日本帝国主義の本質を暴露する寓意が込められているとするのが本稿の解釈なのだが、このような背景を踏まえて、半三郎の失踪に対して「順天時報」の主筆牟多口が「発狂」と断定する記事を掲載するというところを考えてみよう。

この部分はきわめて隠微な皮肉・嘲笑といってよい。というのは、これも後述することだが、もしも半三郎の失踪が日本帝国主義の本質の暴露だとすれば、その大陸政策そのものが「発狂」ということになるからだ。したがって、「順天時報」に冠する「公道を代表する」という表現は、「順天時報」主筆牟多口という名が〈無駄口〉の暗喩として用いること、またこれらの皮肉な仕掛けによって、「順天時報」というメディアの本質を暴き出しているといえるのである。それはいうまでもなく「順天時報」のもつ日本帝国主義を正当化するためには欺瞞をもあえておこなう姿勢に対する厳しい諷刺なのである。

以上見てきたように、「神秘」を力説する「同仁病院」の山井博士といい、忍野の失踪を「発狂」と決めつける言説を正当化しようとする「順天時報」の主筆牟多口といい、両者はともに国策下にある機関に属する人物ということから、「順天時報」と「同仁病院」が日本帝国主義と共犯関係にあることを訴えていると読むことができよう。両者とも実は日本帝国主義の大陸進出が正当性にもとづかない「神秘」であり、それゆえに「発狂」しているのである。それとともに、彼らの造型はすでに触れたように、それぞれの命名寓意からしても、彼らの病院と新聞とがある意味で日本帝国主義の孕む狂気、あるいは虚偽性をかかえこんだ存在であることを表象している。

三、主人公半三郎の分裂

以上、テキストに表れる主要な登場人物とそれに関係する機関が帯びている表象について考察してきた。そこに読みとれるのは、日本帝国主義を嘲笑と皮肉を込めて諷刺する文脈や意味であった。このような文脈の中に、死から復活した忍野の身体に〈馬の脚〉が取り付けられるという設定が位置づけられる。この設定が一体何を意味しているのかについては、従来の先行論文でも問題とされてきた。しかし本稿が提示したい方向性はこれまで論じてきたような方向につらなるものである。これ以降、本稿の見解をテキストの内部と外部の分析によって明らかにしていきたいと思うのだが、この節では、まずテキストの内部の文脈の分析から見てみよう。

忍野半三郎は、復活した日から脚が〈馬の脚〉に変わったことによる不安を日々持ち続ける。もしそのことが妻をはじめとして周囲の人々に一旦わかってしまった日には、今までの生活秩序が狂ってしまうので、懸命に脚の秘密を隠すことにつとめる。彼は会社、同僚の疑惑を避けるために苦心し、特に妻の目から秘密を隠すことに必死であった。しかし、

運命は半三郎の為に最後の打撃を用意してゐた。と言ふのは外でもない。三月の末の或午頃、彼は突然彼の脚の躍つたり跳ねたりするのを発見したのである。なぜ彼の馬の脚はこの時急に騒ぎ出したか？　（二四九頁）

半三郎は当日会社にゐた時も、舞踏か何かするやうに絶えず跳ねまはつてゐたさうである。又社宅へ帰る途中も、

たつた三町ばかりの間に人力車を七台踏みつぶしたさうである。最後に社宅へ帰つた後も、（中略）彼は犬のやうに喘ぎながら、よろよろ茶の間へはひつて来た。それからやつと長椅子へかけると、あつけにとられた細君に細引を持つて来いと命令した。（中略）「早くしてくれ。早く。―早くしないと、大変だから。」常子はやむを得ず荷造りに使ふ細引を一束夫へ渡した。すると彼はその細引に長靴の両脚を縛りはじめた。彼女の心に発狂と言ふ恐怖のきざしたのはこの時である。（中略）半三郎は何か大声を出すが早いか、三尺ばかり宙へ飛び上つた。常子はその時細引のばらりと切れるのをみたさうである。

（二五〇頁）

ここからは自己の内なる他者の認識という解釈が可能となる。この理性の分裂から狂気へという展開を読みとろうとする方向性は、先行論でもすでに指摘されてきているように、新しい見解ではないが、たとえば「彼は突然彼の躍つたり跳ねたりするのを発見した」「舞踏か何かするやうに絶えず跳ねまはつてゐたさうである」ということから、この理性の分裂から何を読みとるかという点に関しては、それぞれの傾向がうかがえる。たとえば、単援朝は「平凡な家庭生活を脱出しようとする本能願望と、それを維持しようとする理性や道徳の相克、（中略）芥川自身の問題でもあろう[22]」という、作者自身の家庭問題とみなす指摘が見られる。その一方で、「見られる〈我〉とそれを見ている〈我〉との相克」を描くことで「〈我〉というものの持つ可変性や〈我〉の乖離という現象について、言葉によって〈我〉を〈他者〉に告白することの不可能性と、その〈我〉を関係性の中に取り込むことによって〈我〉を埋没させる社会規範のあり方の病的部分を描いた」とする阿部寿行の指摘[23]が見られるが、本稿ではそれらとは違った角度での解釈を試みたい。

本稿の立場からすれば、この場面は、忍野半三郎という人物の内部に抑圧されていた大陸進出における日本帝国主義者の本質（欲望）が露呈したという方向で読み取れるということである。つまり、北京に進出した日系商社のごく平凡な会社員が実は日本帝国主義の本質（欲望）を露わにした人物へと変貌したという、劇的な変身の寓意ととらえることである。その読みを可能にさせるのは、前掲の引用文の前後に織り込まれている次の引用文である。

当日は烈しい黄塵だつた。黄塵とは蒙古の春風の北京へ運んで来る砂埃りである。（中略）半三郎の馬の脚は徳勝門外の馬市の斃馬についてゐた脚であり、その又斃馬は明らかに張家口、錦州を通つて来た蒙古産の庫倫馬である。

すると彼の馬の脚の蒙古の空気を感ずるが早いか、忽ち躍つたり跳ねたりし出したのは寧ろ当然ではないであらうか？且又当時に塞外の馬の必死に交尾を求めながら、縦横に駆けまはる時期である。して見れば彼の馬の脚がぢつとしてゐるのに忍びなかつたのも同情に価すると言はなければならぬ。（二四九頁）

ほんの一瞬間、玄関の先に佇んでゐた。が、身震ひを一つすると、丁度馬の嘶きに似た、気味の悪い声を残しながら、往来を罩めた黄塵の中へまつしぐらに走つて行つてしまつた。（二五一頁）

忍野の脚に取り付けられた〈馬の脚〉は当初は時たま彼の意志では自由に制御できないほど勝手に暴れだしていた。が、やがて「三月の末の或る午後」に北京へ吹き運ばれてくる蒙古の黄塵を感ずるや、たちまち「躍つたり跳ねたり」し出し、やがては妻の常子に「細引を持つて来」させ、彼自身が「その細引に長靴の両脚を縛」らねばならないほどになった。しかしそれもむなしく「黄塵」の中へ走って行ってしまい、こうして失踪する。

どうしてそうなったのかといえば、そもそも、半三郎の〈馬の脚〉は徳勝門外の馬市の斃馬であり、「張家口、錦州を通つて来た蒙古産の庫倫馬」であったからだ。身体の一部に〈馬の脚〉をつけられた半三郎は自己の内なる国家的欲望が理性を乗り越えて「蒙古」の「黄塵」を感じ、〈馬〉として行動しようとしたというのであろう。半三郎は一生懸命暴れ出す脚を細引で縛ろうと勤めた。が、その脚は結局「制御」できず、ついに「黄塵」の中に走り込んでしまう。その寓意を、半三郎の理性の分裂によって彼自身の身体が他者となって、彼の理性と衝突したことを意味として解釈するのも無理はない。身体の一部に〈馬の脚〉を付けられたからには、半三郎の理性に反して、脚は〈馬〉（他者）として行動しようとする分裂症に陥ったという解釈になろう。ただそれでも、半三郎の〈馬の脚〉以外の上半身は人間（理性）としての身体性を保とうとして勝手に暴れ出す〈馬の脚〉を「制御」しようとする。が、理性は馬としての身体性には勝てず、それに従い「黄塵の中へまつしぐらに走つて行つて」しまう。

このように、自己と自己の内なる他者の関係としての寓意ととらえることは、十分説得力を持つものであるかも知れない。しかしそこから導き出された狂気の問題を、作家芥川の経歴に還元したり、あるいは近代人の自我の一般論への結びつけることがこの作品の十全な解釈だろうか。人間が国家・社会・家族との関係にあってどう生きるべきかという問題が、

作家芥川がこのテキストで追求したものであったと筆者は考える。このことは〈馬の脚〉―「蒙古産の庫倫馬」―蒙古の「黄塵」〉という一連の表象に反映されている。そこから忍野の内部に抑圧されていた帝国主義国家の欲望の露呈をとらえることができるのである。一個の平凡な人間が国家の意志にいやおうなくとりこまれてしまう悲劇的なありようを暴き出すことが、作家芥川がこのテキストにどうしても込めたかった寓意であったのではないか。

とりわけ、第一節で考察した主人公忍野半三郎の死と復活という変身のモチーフの意味を想起する必要があろう。ここで論じた方向性はまさに変身のモチーフが含んでいた意味を前提として展開されたものであり、ここでの解釈は忍野半三郎の変身のモチーフがあってはじめて可能な寓意ということになろう。こうして「馬の脚」の寓意はこのテキストの意図を実現していくことになる。

四、「馬の脚」のテキストと外部のコンテキスト

以上「馬の脚」のテキスト内部の文脈から見て、〈馬の脚〉を取り付けるという奇妙な場面の設定は、忍野半三郎の内部に秘められていた帝国日本の欲望の露呈を寓意していることが確認できた。しかしこれまでの解釈では、帝国日本の大陸進出、主人公の内部に抑圧されていた帝国日本の野望の暴露までは読むことができても、問題は当時の読者が寓意という隠された文脈を読むことができただろうかという問題は残る。つまり、テキストの外部に「馬の脚」の寓意を認識できる政治的社会的コンテキストが存在したかどうかということを考えていく必要があるのである。人間の体に〈馬の脚〉を取り付けるという奇妙な場面の設定には作家芥川の「作為の痕跡が深く残って」[24]いると、秦剛は指摘しているが、まさにその通りだと思われる。それでは同時代の読者はどのような政治的コンテキストの情報にもとづいてこのテキストを理解したのだろうか。同時代資料と照らし合わせることで、その時代にあって「馬の脚」のテキストからこれまで論じてきたような意味が捉えられるのかを明らかにしてみようと思う。

前述したように、テキストの時代背景に想定されている中国の第一革命（辛亥革命）の直後は、西欧列強の大陸争奪と中国国内の革命運動で混乱と政権不安定な時期にあたっていた。さらに日清戦争を機に日本もまた大陸進出を果たし、当時の対華政策の一環として、「大陸浪人」を通して大陸に関与することを打ち出した。その具体的な大陸戦略ともいうべ

きものが満蒙独立運動であった。しかし注意したいのは、これを〈独立〉と呼ぶのは日本側の立場であって、旧清朝の全遺産の継承を主張する中華民国側からすれば〈分離〉〈争乱〉なのである。同じ運動は立場の違いによって両義性をもつ。日本帝国主義の国策は直接的に大陸浪人を独立運動に参画させ、独立後には彼らを通して満蒙の独立国を日本政府が操るという、間接的な植民地化をねらうものだった。こういった背景は「馬の脚」のテキストを読む上での同時代の政治的社会的コンテキストにどのように反映されているのだろうか。この点を明らかにするためには、まず大陸浪人および満蒙独立運動にかかわった馬賊とは何かを説明しなければならない。

大陸浪人とは近代日本の社会で中国とさまざまな関係をもっていた人々からなる集団であって、その定義についてはいまだ論議があるが、政治家等と見なすもの[25]や民間人と見なすもの[26]もあるように、さまざまな性格をもった雑多な人間による複雑な集合体だと考えてよい。本稿では、リチャード・ティーコンの「大陸浪人」[27]の定義を用いたいと思う。それによると、

過激な国家主義政治家やその諜報員、さらに黒竜会、血盟団から愛国政治同盟や桜会にいたるまで日本の多数の秘密結社の会員を意味した。だれが「浪人」であり、だれがそうでないかを見分けるのはかなり困難なこともあった。日露戦争以来、彼らは中国、満州、ときにはモンゴルでもスパイとして使われてきた。その目的のため、彼らは事務員や農夫、あるいは聖職者、またときには巡礼や乞食といったじつに種々さまざまな偽装を用いた。彼らがなんらかの諜報機関から資金を受け取っていたのはたしかである。

とある。その中でも特に取り上げたいのは、満蒙独立運動を画策したり、あるいはそこに参加した大陸浪人である。彼らは日露戦争以来、日本の満蒙権益を手にいれようと渡満し、文字通り、定職を持たない浪人や、商売などを経営しながら情報収集に従事した人などから構成されていた。彼らの活動は表面上、民間人としてのそれであり、日本政府との間に関係がないように装われていたが、実際には、日本政府や軍部の一部有力者と密接に結びつき、強力な援助を受けていた。[28]とりわけ、辛亥革命の混乱のさなかでは、大陸浪人の活動は露骨なものとなり、彼らを中心とする満蒙独立運動が三回にわたって行われた。

このような史実とともに注目すべきなのは、彼ら大陸浪人の中に馬賊団を組織する人物が現われたことである。馬賊と

は、もともと「紅胡子」あるいは「胡匪」などと呼ばれた中国民間の流賊的な兵隊である。ただし日露戦争の際、大陸にわたった大陸浪人が馬賊となる場合もあった。彼らの多くは日本軍の「謀略馬賊」の発端ともなった「特別行動班」や「満州義軍」の百騎、二百騎と群れをなして山野をあばれまわる精悍な馬賊的行動にあこがれた者たちだった。このような大陸浪人を頭目とした馬賊が、中国の清朝政府崩壊後の混乱状況の出現とともに満蒙独立運動に積極的に介入したのである。とくに「黒竜会や玄洋社系の人々がそれに拍車をかけ、清国が崩壊してまもなく、三回にわたる満蒙独立運動には、これに参加した日本人や馬賊団はかなりの数にのぼった」[29]とされている。

では、このような馬賊や満蒙独立運動といったテキスト外部の政治的コンテキストは、「馬の脚」の当時の読者層によって捉えることができたのだろうか。この可能性を探るために、当時の読者層がもつ知識にとって大きな位置を占める新聞から考察していくこととする。

日本にとっての主な満蒙問題とは、満鉄に関わる「日支共存共栄主義」とその背後にひそむ利権の問題であり、また満州に移民した日本人の将来をめぐってのものであった。たとえば、『神戸新聞』（一九一三・一〇・一三）の「満州の鉄道権―日本の満蒙五鉄道利権獲得（其三）」、『国民新聞』（一九一三・十一・二十七〜二十九）に連載された「満蒙利権獲得地（上、中、下）―日本の満蒙五鉄道利権獲得（其十七）」、『大阪朝日新聞』（一九一四・四・二五〜七・一七）の「今後の満鉄」（一〜二六）、『大阪朝日新聞』（一九二一・一〇・三〇）に掲載された「満蒙開発と満鉄の貢献」といった記事があり、また、満鉄の大陸経営、主に満州における利権問題をめぐる社説も盛んに論じられた。

ここではその論調を確認するために『大阪朝日新聞』が一九一四年（大正三年）四月二五日から七月一七日にかけて連載した「今後の満鉄」という特集記事、それに神戸新聞が一九一三年（大正二年）十月一三日に掲載した社説「満州の鉄道権」から引用することにする。

1満鉄は単に一株式会社に過ぎざるにも拘らず小にしては満蒙地方開発の為、大にしては世界文明向上の為特殊の使命を帯べるものにして世間一般の営利会社と其趣を異にせるは当然なり而して其特殊の色彩こそ即ち満鉄会社の生命にして又以て中外に誇称するを得る点なりとす。（改行）満鉄は其創立以来夙に日支共存共栄の主義を一大方針となし、常に之を厳守して之が遂行と其主旨の徹底の為に最善の努力を費し来れり。従前に於ては万般の施設に対

し反って疑惑の眼を以て見らるるの傾向ありたるも、近時支那人殊に満蒙地方の近接在住民間に漸次該主義を諒解する者増加し来りたるは日支両国の為めに誠に慶賀すべき現象なり。満鉄の事業が日本にとりて有益なるは勿論、之が直接間接に支那殊に満蒙の開発となり、満蒙の開発が又満鉄の事業をして活発ならしめ、互に循環的に相助成して、日支両国が密接にして離るべからざる共同利害関係に立つべきことは正に理論上より然るのみならず之を従来の実際に徴すれば益々其の然ることを容易に発見し得べし。

（「満鉄と日支共存共栄主義」）

2駸駸乎として殖民的発展の新政策を満蒙の曠野に施すべき満鉄会社の幹部

3而して是満鉄会社自身にとりて業務経営の順序上当然為さざるべからざる手段なると共に我国人の満州の曠野に於ける活躍助長し、国民の大陸発展を誘導するの方法である。

4我国勢上の関係、経済的の関係及び国防上の関係よりして是非とも南満鉄道と同様なる条件とし敷設権も経営権も全然是を我国に収めざるべからずと出張する者である、而して之（満蒙五鉄道—引用者注）を経営するには満州鉄道に経験あり、満州交通機関の根幹を支配しつつある満鉄会社に於ても将来永遠の利益を図り、国家対満蒙政策を稽え、是非とも之が経営に着手すべき任務を負えるものと云うべきである。

5満州が我植民地に適せるや否やは己に過去の問題に属す、今日己に十万の邦人が満州の各地に散在して無事安泰なる生活を送り、増殖力など却て内地に比して勝って居ることは統計の示す所である、土地の富力の点より商工業の点より満州が我植民地として適当せることは諸種の材料によりて確実に認識されつつあるは事実である、併し植民地の経営は欧州列国何れも其の趣を異にして居る英仏は投資によりて之を行い露国は移民を以て重しとする、結局は各国の経済状態によりて分れ来るものであるが我国の満州植民地の経営は投資、移民何れを原則とすべきかを考うるの余地は殆ど無い、（下略）

これら記事群のうち、1～4が満鉄が果たす「日支共存共栄主義」の論調であり、5が満州に移民した日本人の動向についてのものである。このように日本内地にとって満蒙は、満鉄の経営、日本人の大量移民を介して関心を持たれるようになったことがうかがえる。こうした関心の中で問題となったのが満蒙で暴れる馬賊への憂慮であり、満鉄の利権拡大を通して国策を強行しようとする日本陸軍の暗躍であった。

6而も新市街の建設と警備の周到とは治安の維持を保ち、満州名物の馬賊の群は数十百人団体をなして日夜所在の良民を脅かしたるもの今や新市街の附近には被害極めて稀有となれり。支那人は其の生命財産の安固を喜びて新市街に入り来るもの甚だ多く、

7満州住民の二大脅威は馬賊と流行病とにして馬賊は剣を以て其の財産を脅かし流行病はバチルスを以て其の生命を襲う。満州住民は此の二者の脅威を脱せずんば安じて文化的経済的生活を営むことを得ず、然るに近時交通の発達、産業の開発都市の繁栄は漸次馬賊横行の縮小し、鉄道沿線は殆どその脅威を脱することを得たり。

8対支交渉の結果、我国は今回満州に於て（中略）鉄道布設権を獲得したりと伝えらるるは果して、真なりや。（中略）南府鉄道は、南満州に於ける我勢力を確定するのみならず、遠く西に及びて蒙古に膨張し、鄭家屯鉄道は、南に及びて、北支那の中枢を衝くの概を示す。（中略）満蒙問題は云ふ迄も無く対支政策中の重要分子にして、之が解決に就いては、各人相当の抱負を有し、相当の手段を考えつつあり。彼の陸軍閥及び其の周囲の集まれる官僚系統の政治家連は、武力を以て一挙に解決すべしと説き、明かに二個師団増設の背景を為せるあり。（中略）日露協約なるものを、見ずや、我は西部蒙古即ち外蒙古の利権を露国に譲り同時に彼は南満と東部蒙古即ち内蒙古の利権を我れに譲りたるに非ずや。（中略）我満蒙政策が、陸軍閥及官僚者流の我田引水的弁論に迷わされて、其の基礎を軍事的行動に置きて、経済的施設に置かざりしに在り。

9蒙古義軍総統巴布札布将軍は宗社党及庫倫政府海拉爾政庁等より多大の援助を得且兵器弾薬の補充を得たるを以て

意気大いに昂り去五日に至り態々蒙古独立の義兵を挙げ海拉爾を中心として五千の兵を率ひて蒙古の最大重要の地点なる？南府に向つて進軍を開始したるが沿道の蒙古諸王は悉く響応援助しつつあり（中略）鄭家屯の呉鎮守は自ら兵を率ひ？南の防衛を固くして義軍を全滅せんとしつつある（中略）義軍が今後如何なる方面に活躍すべきか刮目に値す可し

「蒙古義軍南下▽巴布札布蹶起」

（『読売新聞』一九一六年七月十八日朝刊二面）

6、7は馬賊問題への憂慮、8は日本陸軍の画策への憂慮を示している。9は蒙古の独立挙兵、いわゆる第二次満蒙独立運動について述べているものだが、このような満蒙独立問題への言及は他にも散見される。注意しておきたいのは、これらの記事群および当時の全般的な新聞記事からは日本人が満蒙独立運動に参与したという言及は見られないということである。

新聞記事以外にも満蒙に疾駆する馬賊に関する物語や記事を見つけることができる。まず、明治期に出版された江見水蔭の「女馬賊」（明治四二年一月）、「武装の巻：軍事小説」（明治三十七年五月）など、日本人が馬賊に加わり活躍する小説が注目される。[30] それ以外はほとんどが探険記、遠征奇談、清国、満州での旅行記などだが、そこには満州における馬賊の情況が紹介されている。

この他にも、明治末から大正初期にかけて、押川春浪の軍事冒険小説は青少年の大陸雄飛の夢を育んだ。小日向白郎（馬賊名・尚旭東）は、子供の頃から春浪の軍事冒険小説に魅せられて一生に一度は大陸踏破をしてみたいと思っていた。それが、大陸へ渡って馬賊の頭目になったきっかけだったという。芥川も押川春浪の小説の愛読者であり、彼の軍事冒険小説『海底軍艦』をはじめとする一連の冒険小説を読んだと「愛読書の印象」[31]の中で回想している。府立中時代の制作ノートには「絶島之怪事」[32]と題したものがあるが、これは『少年世界』に連載された春浪の『絶島通信』（一九〇三・九～一二）を下敷きにして書いたものとされている。

このように芥川だけでなく多くの青少年に影響を与えた春浪の小説の系譜は、『少年世界』『日本少年』や『少年倶楽部』など、子ども向けの大衆的児童文学雑誌を主な発表の場として発展した。たとえば、有本芳水は『日本少年』の編輯長や

主筆を歴任し、馬賊ものでは『武侠小説馬賊の子』（実業之日本社　一九一六）などを書き下ろしている。また『日本少年』には池田芙蓉の「馬賊の唄」（一九二五・一～一二、一九三〇・一～一二）なども連載されている。『少年倶楽部』では、宮崎一雨が「熱血・小説—馬賊大王」（一九二三・一～一九二四・一）を連載して人気を集めた。この小説の中で、猪熊大八少年は日露の開戦を前に満州の地理や風俗を研究するため単身で満州に潜入するうち、偶然、馬賊の頭目・張青龍（正体は日清戦争中、行方不明になった元特務曹長）と知り合う。張の依頼を受けて大八少年が謎の馬賊集団を調べに行くと、頭目は西南戦争で戦死したはずの老英雄・辺見十郎太だとわかる。[33] 大八少年は二つの馬賊団を併せて指揮し、露軍の後方を脅かす。

このように、西南戦争の生き残りが馬賊の頭目になっているという設定は、この頃の軍事冒険小説に共通するパターンであった。そのほかにも、「僕も行くから君も行こ、狭い日本にゃ住み飽いた、波の彼方にゃ支那がある、支那にゃ四億の民が待つ（略）」（傍点は引用者による）という「支那」とりわけ「満洲」を舞台とする歌「馬賊の歌」がある。梅原貞康の「「馬賊の唄」の系譜」[34] によれば、この歌の曲が歌われ始めたのは一九二二年のことだった。歌の曲は鳥取春陽が、いわゆる「大陸浪人」が歌っていた歌のメロディーをもとに作曲したとされている。作詞者については、ヴァイオリンを得意とした演歌師・宮島郁芳という説や、宮崎滔天という説があるとされる。

大衆児童文学の作家の多くは、文献や関係者の話などから材料を仕入れただけで、実際に満蒙の深部にまで旅行することもなく、想像力のみで馬賊を描いた。明治以来青少年の血を湧かせた馬賊に対する大衆レベルでのイメージは、このように通俗案内書や紀行文などによるところが大きかったのである。

以上挙げた冒険小説などの読物には新聞と同じように、満蒙独立運動のような緊迫した外交問題はもちろん取り上げられていない。つまり、読者は新聞によって満蒙問題に関する日本人の移民の定着、満鉄の利権の拡大、そして馬賊の活躍などの政治的・外交的コンテキストを捉え、冒険小説によって馬賊を大陸に疾駆するロマンの表象として捉えていたのである。このことは「馬の脚」における〈馬の脚〉が一体なにを指しているのかに深くかかわっている。

そこであらためてテキストの半三郎の〈馬の脚〉が「蒙古の空気」を感じて「忽ち躍つたり跳ねたりし出した」という場面に戻ろう。「蒙古」と「黄塵」は、蒙古の砂漠を思わせると同時に、前述してきたような時代背景と読者の情報に照らすとき、当時の蒙古の砂漠を疾駆する馬賊をおのずと想起させるだろう。〈馬の脚〉が、忍野の理性にとって「制御不

能」だったということが忍野の内部に潜む国家の欲望の露呈であることはすでに言及したが、この寓意はさらに拡張して考えることができる。つまり、この寓意から砂漠を疾駆する馬賊を制御できないという意味が捉えられるとすれば、〈馬の脚〉は辛亥革命後の新政権の動揺を機に、満蒙地域へ進出していく帝国日本の欲望の制御不能の表象として見ることができるのではなかろうか。そこには満鉄の利権、日本軍部の拡張策というコンテキストが、作家芥川によってひそかに込められているのである。当時の読者に与えられている情報・知識は、これまで言及した新聞・小説・紀行などによれば、いずれも日本国民にとって好意的に受けとめやすいコンテキストにつながるものだけだろう。しかし作家芥川は、「馬の脚」のテキストを通して「満蒙独立運動」の協力者である「馬賊」が砂漠を疾駆する姿をテキスト外部の文脈として十分に予想していた。このような文脈こそ〈大陸浪人―馬賊―満蒙独立運動〉という帝国日本の植民地政策を告発するものなのである。しかし満蒙に関する正のコンテキストしか与えられていない当時の読者にとって、作家芥川の意図するテキストの寓意を読むことができたろうか。とりわけ満蒙独立運動は帝国日本が極秘に画策していたものであり、一般国民には気づかれることはなかったろう。しかし一般国民（読者）は、〈大陸拡張政策―軍部〉というコンテキストになにか暗い負の陰を予感していたにちがいない。この暗い予感に呼びかけるかのようにしてテキスト「馬の脚」は公表されたのである。

当時の読者はこのテキストを、テキストの置かれた時代状況とともに読んだのである。そこには芥川が得意とする寓意という方法が大いにあずかったことは注意すべきである。「馬の脚」の主人公忍野半三郎は自己の意志に反しながらも、彼自身の内部に潜む国家主義の衝動を突き動かされることで、国策協力会社「三菱」の一社員として、テキストの外部に設定されている「馬賊」として日本国家に協力する行動を果たそうとする。その目的とは「満蒙独立運動」に協力することであった。しかしテキストは「黄塵」の中に走りこんでしまったという半三郎の失踪でもって閉じられている。ただテキストを時代状況とともに読むことが要請されているとすれば、半三郎の姿は満蒙の熱砂に身を投じる「馬賊」の姿と重なる。それは帝国主義への道を突進もうとする当時の日本の制御不能の危険性を作家芥川が感じとっていた可能性を示している。

テキストの結末で、語り手の〈わたし〉は「北京滞在中、山井博士や牟多口氏にあひ、度たびその妄を破らうとした」という形で、事件に関わった人物として作品内に登場し、半三郎の体に取り付けられた〈馬の脚〉の突拍子もない行動を

信じる唯一の存在となる。それは半三郎の失踪を「発狂」と認めようとする周囲の人々に対して唯一半三郎の味方となる立場をとることでもある。この語り手の〈わたし〉と作家芥川の関係に関して、単援朝氏は「陰に陽に自分を語[35]」っていると読み、蔵下氏は「語り手自身が狂人であり、狂人が狂人の日記[36]」であるとしている。本稿の立場からすると、語り手が忍野の〈馬の脚〉を信じようとする姿勢は、その奇抜な寓意を肯定しているからである。そこには、時代状況に対する芥川のスタンスが反映されているといえよう。芥川は〈馬の脚〉という突拍子もない事件の背後に隠されている日本帝国主義による満蒙支配の実態を訴えようとする。要するに、こうした国家政策に反発する作家の姿勢がそこには語られているのではなかろうか。

まとめ

芥川はテキスト「馬の脚」の初出[37]で、「「馬の脚」は小説ではない。大人に読ませるお伽噺である。「大人に読ませるお伽噺」などは認めない人もあるかも知れない。が、認めないのは誤りである。堀川保吉君は或論文の中に夙にこの妄を排斥した（篇末に掲げたのはこの論文、—即ち「お伽噺並びに玩具に関する論文」の一節である）」と前置きしているように、「馬の脚」は一見ナンセンスでユーモラスな寓話風の「お伽噺」となっているが、テキストのタイトルである「馬の脚」は「馬脚を露わす」という意味を表わしているように、包み隠していた事が露われるというふうに解釈できる。

この包み隠していたものが日本帝国主義による大陸進出の画策であるとすれば、芥川にはこのテキストを通して真実を暴露するという意図のあることがわかる。このことはきわめて微妙だが、またきわめて鋭い政治的批判となるために、芥川はむしろ韜晦して「お伽噺」と規定したと考えられる。テキストにはさまざまな作家芥川ならではの技巧が施されている。「馬脚を露わす」というような、文字の駄洒落を使用して諷刺したり皮肉る手法は、登場人物の名前の付け方にすでに見られるが、先行研究[38]でも触れたものであって、これ以上述べる必要はない。その他にも作中に新聞記事に掲載されるだけのヘンリイ・バレットの設定が実に巧みである。テキスト冒頭の半三郎の死んだ後、冥界で二人の「支那人」とのやりとりの部分と、小説の結末に「美華禁酒会長」という肩書きをもつ彼は、酒壜を手にして「頓死」するという形でしかテキストに登場しない。しかし、それはテキスト「馬の脚」という謎の話を構成し、その謎を解くのに欠かせない重要な

設定となっている。すなわち、ヘンリイ・バレットはテキスト全体において、いわば一つの「落ち」として設定された人物と言える。「馬の脚」は「お伽噺」の軽みとテキストの主題の重さが奇妙に融合したテキストと言える。テキストの外部から見た表象としての「馬賊」を用意したところは、あからさまに当時の日本帝国主義政策への作者の批判の意図が読み取れる。「大人に読ませるお伽噺」という提示は、読者に「馬の脚」のテキスト外に秘められたことに対する認識を与えようとする作者の意図が見られる。「馬の脚」は、大阪毎日新聞の視察員として中国訪問（一九二一年）の四年後に発表されたものとして「将軍」[39]「桃太郎」[40]とともに、中国旅行後の産物であり、当時の日本軍国主義政策への批判というまなざしとして読むことができよう。

注

(1) 本稿が用いたテキストは基本的に普及版全集である筑摩書房版『芥川龍之介全集』第五巻（一九八七・二）を使用しているが、初出原稿を底本として使用した岩波書店版『芥川龍之介全集』第二巻（一九九七・一〇）も参照している。
(2) 「芥川龍之介の生涯と芸術」（中村真一郎編『芥川龍之介案内』岩波書店、一九五五）
(3) 「芥川論の余白に」『芥川龍之介』五月書房、一九五五・五
(4) 森英一「馬の脚」解説（菊地弘、関口安義他『芥川龍之介事典』明治書院、一九八五・一二）
(5) 「「馬の脚」から「河童」へ―中期以後の芥川文学の一面」『稿本近代文学』第十六巻、一九九一・一一
(6) 秦剛「〈告白〉を対象化した〈お伽噺〉―芥川龍之介の小説「馬の脚」を中心に」『国語と国文学』第七六巻第二号、一九九九・二
(7) 丸山昏迷『北京』大阪屋号書店、一九二一・三
(8) 東亜同文会編『対支回顧録』上巻、原書房、一九六八
(9) エム・ヴェ・スチャーギナ『三菱・この巨大企業集団』青木書店・一九七五・七
(10) 「北京の邦人」（本願寺派出所）（丸山昏迷『北京』大阪屋号書店、一九二一・三
(11) 菱木政晴「東西本願寺教団の植民地布教」『岩波講座近代日本と植民地4統合と支配の論理』岩波書店、一九九三・三
(12) 『日本人の動物譚―変身譚の歴史―』海鳴社、一九八四・五
(13) 『同仁会四十年史』同仁会、一九四三・六
(14) 草柳大蔵『実録　満鉄調査部』上、朝日新聞社、一九八〇
(15) 中島誠『アジア主義の光芒』二〇〇一・五、九三頁

(16) 周作人『日本談義集』平凡社、二〇〇〇
(17) 対支関係の代表的人物。新聞浪人。中国に三十年近く滞在し、「順天時報」のほかに、福州「?報」、奉天「満州日報」の創刊人。中国語の日刊新聞を三紙、日本語新聞を三紙、モンゴル新聞を一紙、合計七つの新聞を創刊した。軍、財政界との特殊な人間関係を利用して新聞創刊に必要な資金を調達したり、経営に必要な資金を援助してもらった。上海の日清貿易研究所や日本商品展示所の仕事（情報の収集など）に従事したこともある人物。
　菊池貞二の『五十人の新聞人』によれば、「中島翁は日漢新聞紙を通じて、縦横に活躍したばかりでなく、当時民間有志の大物として、隠然たる勢力あり、歴代奉天総領事や、満鉄当局のよき相談相手であつた。」とされる。
(18) 李相哲「満州における日本人経営新聞の歴史」凱風社、二〇〇〇・五
(19) 「日本と中国」（同　注16）
(20) 「日本浪人と順天時報」（同　注16）
(21) 「輿論」一九二四・四
(22) 同注5
(23) 「芥川龍之介『馬の脚』ノート―解体される〈我〉・構築される〈我〉―」（『青山語文』二〇〇一・三）二八頁
(24) 同注6
(25) 高柳光寿・竹内理三編『日本史辞典』角川書店、一九七八年、五八八頁
(26) 『日本大百科全書』一四、小学館、一九八七年、五九六頁
(27) 『日本の情報機関―経済大国・日本の秘密』時事通信社、一九八三・一一
(28) 趙軍『大アジア主義と中国』亜紀書房、一九九七・三
(29) 渡辺龍策『馬賊社会誌』秀英書房、一九八一・一〇
(30) 近代デジタルライブラリーで「馬賊」をキーワードとして検索した結果、明治期だけで十件の書誌がある。
(31) 『文章倶楽部』一九二〇・八
(32) 現物は岩森亀一コレクションを経て山梨県立文学館に収まっている。奥付に「明治三十八年十二月編輯翌九年脱稿／明治三十九年五月七日発行／著者　枯泉生／編輯人　ＲＡ生」とある。
(33) 上田信道「馬賊の唄・物語を駆ける馬賊」（『彷書月刊』二〇〇二・八）
(34) 池田浩士編『「大衆」の登場・ヒーローと読者の20～30年代』インパクト出版会、一九九八・一
(35) 同注5
(36) 藪下明博「『馬の脚』或は、幻想とアイロニーの共存」（『芥川龍之介』第二号、洋々社、一九九三・四）

(37)『新潮』第四十二巻第一号（一九二五・一）初出稿の前置き部分は、日本近代文学館所蔵の初出への書き入れ稿では作者によって削除されている。
(38) 国末泰平「『馬の脚』―冥界からの生還」（『日本文学と人間の発見』世界思想社、一九九三・五）
(39)『改造』一九二二・一
(40)『サンデー毎日』一九二四・七